プログラム・ノート

神保夏子

サン=サーンス：オーボエ・ソナタ ニ長調 作品166

19世紀前半のフランスに生まれ、当時としては珍しい86歳という長寿に恵まれたカミーユ・サン=サーンス(1835～1921)は、その最後の春、独奏用のレパートリーに乏しい幾つかの管楽器のためにソナタを作曲する計画をたてた。全3楽章のオーボエ・ソナタはその中で最初に手掛けられた作品であり、パリ・オペラ座音楽院管弦楽団首席オーボエ奏者のルイ・バ(1863～1944)に献呈されている。**第1楽章**では典雅でのびやかな主題と簡素な和声によって18世紀風の古典美が追求される。**第2楽章**は前後にオーボエ(本公演ではホルン)の独奏による即興風の部分が置かれた牧歌的なアレグレット。**第3楽章**ではきびきびとした行進曲風の楽想の合間に華麗な技巧が散りばめられる。

ドビュッシー(ブルグ 編曲)：スラヴ風バラード

本作品はクロード・ドビュッシー(1862～1918)の最初期のピアノ小品の一つであり、今回はフランスのホルン奏者ダニエル・ブルグ(1937～)による編曲版で演奏される。「バラード」とは物語的な様式による器楽曲の一ジャンルだが、若きドビュッシーはおそらく敬愛するショパンのピアノ曲からこのタイトルを得たのであろう。甘美な和声と愁いを帯びた旋律は同時期の『夢想』などの作品とも似た雰囲気を持ち、当時絶大な名声を博していたオペラ作曲家マスネの影響をも感じさせる。異国的なイメージを喚起する「スラヴ風」の語は、作曲者自身によって後年タイトルから削除された。

ドヴォルジャーク(バボラーク 編曲)：ドヴォルジャーク・ポプリ

アントニーン・ドヴォルジャーク(1841～1904)は19世紀のボヘミアが生んだ大家であり、同時代のスメタナと並んでチェコ国民楽派の代表格と目される。この「ポプリ」は、チェコ出身のバボラーク自身が国民的作曲家の作品の聴きどころを、ホルンとハープのために再構成した「お国もの」メドレー。「我が母の教えたまいし歌」「私にかまわないで」のような歌曲や、ヴァイオリンとピアノのためのロマンティック小品集より第3曲、「家路」(交響曲第9番「新世界より」第2楽章)などのお馴染みのテーマを通して、郷愁を誘う旋律の書き手としては右に出る者のいないドヴォルジャークならではの魅力を堪能したい。

ドビュッシー：『シランクス』

シランクスとはギリシャ神話に登場するニンフの名であり、いわゆるパンパイプの別名でもある。オウィディウスの『変身物語』によれば、ニンフは彼女を追う牧神パンから身を隠すため1本の葦に姿を変えたが、パンはこれを摘んで自らの笛としたのである。ドビュッシーは初期の代表作『牧神の午後への前奏曲』でも葦笛を模したフルートに特別な役割を与えたが、ガブリエル・ムレの戯曲『プシュケー』への付随音楽として1913年に作曲されたこの『シランクス』では、牧神の笛の音が文字通りむき出しのフルート一本で表現される。今回は無伴奏ホルンの音色でその神秘的で官能的な響きをお楽しみいただきたい。

トゥルニエ：『森の中の泉のほとりにて』

波、雨、噴水、水に映る影――近代フランスの作曲家たちは「水」の様々な様態を音楽によって巧みに描き出してきた。透明感のある粒立ちの良い音色を有するハープは、ピアノと共にそうした水の表現に最も適した楽器としてしばしば用いられている。1922年に作曲された本作品では、泉からとめどなくほとばしる水を思わせるアルペジオが旋律を包み込み、玉虫色の煌めきで聴き手を魅了する。作曲者のマルセル・トゥルニエ(1879～1951)はパリ音楽院ハープ科で教鞭をとった人物で、ハープのレパートリーにおいてとりわけ重要な貢献がある。

アンドレ：『晩秋の歌』

2005年までオーケストラのハープ奏者を務めたベルナール・アンドレ(1941～)は、ハープを活用した作品を中心に、モダンな感性と伝統への意識に根付いた様々な楽曲を発表してきた。1995年に出版された本作品はハープの名手リリー・ラスキーヌ(1893～1988)の追憶に捧げられ、ファゴット、チェロ、ホルンのいずれかとハープとの二重奏による詩情豊かな7つの小品から成っている。作曲者は自身の創作全体を貫く原理は「歌(旋律)」にあると述べているが、そうした特徴はこの小品集にも明瞭に表れている。

（じんぼう なつこ・音楽学）